

# Nara Women's University

## 解説: 三、『寂恵法師歌語』の仮名表記

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2011-01-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長谷川, 千秋 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10935/2632">http://hdl.handle.net/10935/2632</a>

### 三、『寂恵法師歌語』の仮名表記——句切れを示す仮名文字遣——

長谷川 千秋

#### 一、はじめに

弘安元年、寂恵は『統拾遺和歌集』撰集にあたって自らの歌が採られなかったことへの抗議として『寂恵法師文』を著した。歌人として、勅撰歌人となることに強い執着をもつ寂恵であったが、その願いは『統拾遺和歌集』において果たされることはなかった。それから三十六年後、寂恵はかつて師事した為家と中書主の和歌をとりあげた歌論書を記す。それが『寂恵法師歌語』である。

これまで『寂恵法師歌語』は、水戸彰考館に蔵される佚名の一本（近世写）<sup>(注1)</sup>が、久保田淳氏によって紹介され世に知られていた。この書名も久保田氏の命名である。彰考館蔵の『寂恵法師歌語』は、『五十四番詩哥合』『屏風詩歌』『長元八年哥合』『月次御会和哥』『融覚一札』と題簽にある合冊本のうちにある。「融覚一札」に続けて記される六丁ばかりの小編で、久保田氏は記載内容から零本とみておられる。孤本とみられていた水戸彰考館本とほぼ同内容をもつ一本がこのたび、大宮武麿氏旧蔵本の中から発見された（大宮本）。大宮本は奥書と筆跡から中院通村の書写かと見られる。この新出資料についてここでは文字論の立場から、現存のもう一本の彰考館本と比較しつつその仮名遣と仮名文字遣を概観する。中世から近世にかけてみられる、字体の使い分けを通して例えば語頭・語中などを明示する現象を、特に仮名遣と区別して仮名文字遣と称する。ここではその仮名文字遣について述べたい。

#### 二、仮名遣

まず、大宮本の仮名遣について述べる。大宮本にアハワ行の仮名遣に関わる語は計62例ある。この時代の仮名遣の規範

といえは定家仮名遣をさす。そこで、定家仮名遣の規範を示した書として最もよく利用されたと思われる『仮名文字遣』によって、この仮名遣を検証すると表一のような結果が得られる。『仮名文字遣』は慶長版本を用いる。

表一から、定家仮名遣に合致しない例はわずか1例であることが知られる。『仮名文字遣』に規定のない17例を除けば、45例中44例が定家仮名遣に合致している。なお、慶長版本『仮名文字遣』は歴史的仮名遣に8割程度一致するが、「を」「お」の仮名遣については5割程度しか一致しない。これは定家仮名遣が「を」「お」の仮名遣をアクセントの高低によって規定し分けているためである。<sup>(注)</sup> 参考までに大宮本における歴史的仮名遣との合致を示せば表二のようなになる。合致しない7例は全て「を」「お」の仮名遣で、この合致のあり方は『仮名文字遣』のそれに近似している。

表一 慶長版本『仮名文字遣』との合致（大宮本）

	を	お	他
一致	14	30	
不一致	1	0	
規定無	1	16	

表二 歴史的仮名遣との合致（大宮本）

	を	お	他
一致	9	46	
不一致	7	0	

『仮名文字遣』に一致しない1例とは、「おこなひたる」（4オ）である。慶長版本『仮名文字遣』には「をこなふ 行」（を）とある。なお、彰考館本はこの箇所を「をこなひたる」とし、定家仮名遣に合致している。例外1例があるが、大宮本のアハワ行の仮名遣は定家仮名遣に基づくといっただろう。

彰考館本は、アハワ行に拘わらず全体として大宮本よりも漢字表記を多用する傾向があり、アハワ行の仮名遣も43例と少ない。しかし、その仮名遣は大宮本とほぼ同じで、右の「おこなひたる」を含めて3例が相違するにすぎない。という

ことは、彰考館本(彰)も定家仮名遣をよくふまえるともみてよい。問題は大宮本(大)と相違する2例の仮名遣であろう。

- ・つゐてに (彰) — ついてに (大)
- ・をろかなる(彰) — おろかなる(大)

「つゐてに」は、慶長版本『仮名文字遣』には「ついで 次」とあり、大宮本の表記が規範に合っている。但し、文禄四年写陽明文庫本『仮名文字遣』には「ついでつゐても 次」と両表記を許容した本文がある。「い」と「ゐ」のゆれかどうかは不詳だが「つゐて」もあつたとすれば、彰考館本の表記も定家仮名遣に合致していることになる。また、「をろかなる」は、慶長版本をはじめ管見の諸本に仮名遣の規定のない語である。「つゐてに」を『仮名文字遣』の一致例に含めれば、彰考館本では全ての例が定家仮名遣に一致していることになる。具体的な数値を表三に示す。なお、歴史的仮名遣との合致度を表四に示す。

表三 慶長版本『仮名文字遣』との合致(彰考館本)

		一致	不一致	規定無
他	をお	21	0	1
		0※		9

※「つゐてに」を一致例に含める

表四 歴史的仮名遣との合致(彰考館本)

		一致	不一致
他	をお	30	5
		0	

定家仮名遣に忠実な仮名遣が実現していることは、ここにみられる仮名遣が表語意識に基づくものであることになる。二本に共通した仮名遣がみえることは、この仮名遣が寂恵の仮名遣に遡る可能性を示しはする。但し、寂恵は『仮名文字遣』

遣』成立以前に没したとみられる。『仮名文字遣』成立以前に定家自ら『下官集』に仮名遣の規範を示しているが、寂恵がこれを見ることができたとしても、わずかな用例からどこまで定家の仮名遣を知り得たかどうか。仮に寂恵の仮名遣であったとしてもその仮名遣は定家仮名遣に偶合した仮名遣と考えられよう。しかし、定家仮名遣への右のような完全な一致は、その可能性よりは、むしろ後人が『仮名文字遣』などによって改めたこととみることを示唆する。

### 三、仮名文字遣

次に大宮本と彰考館本の仮名文字遣についてみる。大宮本で有意の仮名文字遣としては、語頭の明示という位置による字体の使い分けが主流をなす他は、語と結びつく仮名文字遣が散見する。彰考館本のそれと比較すると、大宮本と同じ有意の仮名文字遣が彰考館本にもみえることが多い。そこで、両本の文字遣を概観するために、字体を語頭・語中の違いによって分類した表を次に掲げる。字体とは、具体的な字形が実現されるための価値的な前提のこと<sup>（金持）</sup>をいい（〈あ〉のように揭示）、基本的に字母の相違を字体の相違とみなす立場をとる。但し、同一字母のくずし方の異なる字形が字体の示差的性質を担って、記述に対して有意的な仮名文字遣を実現する場合もあり、それを考慮してこの表では視覚的差異の顕著な字形も区別してある。両本共に仮名書き例は全て和語である。なお、『寂恵法師歌語』は前述の通り、為家と中書王の和歌の引用と、それを評することを通して歌論を展開する本文とからなっているが、和歌の引用箇所に出現回数<sup>（金持）</sup>の少ない、筆数の多い字体が用いられる傾向がある。この微差を考慮して、表では本文と和歌の合計数に続けて（ ）内にそれぞれの小計を示した。煩雑な表であるため両本共に文字観念中（異なる字体が示す文字としての価値的同一性、「あ」のように揭示）一字体しか使われていないものは、その字体のみを表には掲出し、用例数の提示を割愛した。

表五 大宮本・彰考館本の文字遣一覧

「 」	〈 〉	大		彰	
		語頭 (文/歌)	語中 (文/歌)	語頭 (文/歌)	語中 (文/歌)
あ	あ	19(11/8)	5(3/2)	7(5/2)	1(1/0)
	ゐ	0(0/0)	1(0/1)	7(4/3)	5(2/3)
い	い				
う	う				
え	え				
お	お	5(4/1)	0(0/0)	4(1/3)	0(0/0)
	か	4(3/1)	0(0/0)	1(1/0)	0(0/0)
か	あ	11(6/5)	52(37/15)	7(5/2)	45(31/14)
	か	13(11/2)	1(1/0)	8(5/3)	1(0/1)
き	ふ	—	—	2(1/1)	1(0/1)
	き	5(4/1)	25(21/4)	3(2/1)	10(10/0)
	き	—	—	0(0/0)	10(6/4)
	こ	0(0/0)	4(4/0)	0(0/0)	2(2/0)
	こ	1(0/1)	1(0/1)	0(0/0)	3(2/1)
	く				
け	あ	0(0/0)	7(4/3)	0(0/0)	2(1/1)
	け	0(0/0)	8(4/4)	1(0/1)	8(4/4)
	け	—	—	0(0/0)	1(0/1)
	け	1(0/1)	6(1/5)	—	—
	き	0(0/0)	1(1/0)	1(0/1)	7(3/4)
	き	0(0/0)	1(1/0)	0(0/0)	1(0/1)
こ	こa	9(8/1)	6(5/1)	2(2/0)	4(2/2)
	こb	20(18/2)	3(3/0)	6(5/1)	3(3/0)
	こ	3(2/1)	1(0/1)	5(3/2)	0(0/0)
さ	さ	4(3/1)	15(9/6)	5(4/1)	12(8/4)
	さ	7(4/3)	0(0/0)	6(2/4)	0(0/0)
し	し	8(4/4)	56(41/15)	3(2/1)	48(35/13)
	し	7(4/3)	0(0/0)	11(4/7)	0(0/0)
す	す	6(5/1)	4(3/1)	0(0/0)	3(1/2)
	す	1(1/0)	9(4/5)	1(1/0)	6(3/3)
ぬ	ぬ	4(4/0)	1(1/0)	6(5/1)	4(3/1)
	ぬ				

「 」	〈 〉	大		彰	
		語頭 (文/歌)	語中 (文/歌)	語頭 (文/歌)	語中 (文/歌)
せ	さ	1(1/0)	6(3/3)	2(2/0)	0(0/0)
	せ	1(1/0)	3(2/1)	1(1/0)	4(3/1)
	せ	—	—	0(0/0)	2(0/2)
そ	ろ	8(6/2)	2(2/0)	4(4/0)	3(1/2)
	そ	3(3/0)	4(3/1)	0(0/0)	9(8/1)
	そ	2(1/1)	6(3/3)	—	—
た	た	2(1/1)	27(21/6)	1(0/1)	28(22/6)
	た	1(0/1)	6(5/1)	3(1/2)	2(1/1)
	た	4(1/3)	3(2/1)	1(0/1)	0(0/0)
	た	—	—	1(0/1)	1(0/1)
つ	つ	7(7/0)	8(6/2)	2(2/0)	3(3/0)
	つ	0(0/0)	6(3/3)	0(0/0)	3(1/2)
	つ	2(2/0)	0(0/0)	—	—
	つ	—	—	5(5/0)	7(5/2)
て	て	0(0/0)	36(32/4)	0(0/0)	25(22/3)
	て	—	—	0(0/0)	4(3/1)
と	とa	7(6/1)	0(0/0)	6(4/2)	1(1/0)
	とb	4(2/2)	63(52/11)	2(2/0)	39(33/6)
	と	0(0/0)	2(1/1)	1(1/0)	5(3/2)
な	な	8(7/1)	31(25/6)	9(6/3)	22(19/3)
	な	0(0/0)	2(1/1)	—	—
	な	0(0/0)	1(0/1)	0(0/0)	2(0/2)
	な	0(0/0)	1(1/0)	0(0/0)	4(2/2)
に	に	3(2/1)	41(32/9)	0(0/0)	36(34/2)
	に	0(0/0)	10(3/7)	1(1/0)	5(2/3)
	に	0(0/0)	2(1/1)	0(0/0)	16(3/13)
ぬ	二	0(0/0)	2(2/0)	—	—
	ぬ	1(0/1)	6(3/3)	1(0/1)	7(3/4)
ぬ	ぬ	0(0/0)	1(0/1)	—	—
	ぬ				

「 」	〈 〉	大		彰	
		語頭 (文/歌)	語中 (文/歌)	語頭 (文/歌)	語中 (文/歌)
ね	ね	1(0/1)	2(2/0)	—	—
	糸	1(0/1)	3(2/1)	1(0/1)	3(2/1)
の	の	6(6/0)	64(45/19)	2(2/0)	17(16/1)
	乃	0(0/0)	12(9/3)	0(0/0)	24(21/3)
	此	0(0/0)	29(19/10)	0(0/0)	35(28/7)
	能	—	—	0(0/0)	2(0/2)
	ほ	0(0/0)	2(1/1)	0(0/0)	2(0/2)
	と	—	—	0(0/0)	18(2/16)
は	と	3(0/3)	11(8/3)	1(0/1)	6(4/2)
	ハ	2(2/0)	14(11/3)	0(0/0)	10(10/0)
	と	0(0/0)	7(5/2)	0(0/0)	10(6/4)
	は	—	—	0(0/0)	1(1/0)
ひ	ひ	1(1/0)	17(14/3)	1(1/0)	13(11/2)
	ん	1(0/1)	0(0/0)	—	—
ふ	ふ	6(1/5)	9(6/3)	4(0/4)	9(4/5)
	ぬ	—	—	1(1/0)	1(1/0)
へ	へ	1(1/0)	24(18/6)	0(0/0)	18(15/3)
	契	0(0/0)	1(1/0)	—	—
	通	—	—	0(0/0)	3(2/1)
ほ	ほ	3(2/1)	5(2/3)	4(1/3)	1(0/1)
	り	2(1/1)	2(2/0)	2(2/0)	5(4/1)
	和	—	—	1(0/1)	0(0/0)
	亥	1(0/1)	0(0/0)	—	—
ま	ま	7(3/4)	16(11/5)	3(1/2)	4(4/0)
	万	0(0/0)	2(2/0)	0(0/0)	2(0/2)
み	ほ	—	—	4(2/2)	3(3/0)
	ミ	6(3/3)	3(2/1)	2(2/0)	4(3/1)
む	み	7(3/4)	1(1/0)	5(1/4)	2(1/1)
	む	3(2/1)	10(7/3)	1(0/1)	9(6/3)
む	赤	0(0/0)	1(0/1)	0(0/0)	3(0/3)

「 」	〈 〉	大		彰	
		語頭 (文/歌)	語中 (文/歌)	語頭 (文/歌)	語中 (文/歌)
め	め	3(2/1)	7(3/4)	2(2/0)	4(2/2)
	梵	0(0/0)	1(0/1)	0(0/0)	3(1/2)
も	も	7(7/0)	19(15/4)	6(5/1)	4(2/2)
	毛	—	—	0(0/0)	14(11/3)
や	や	5(3/2)	9(4/5)	0(0/0)	8(4/4)
	厩	—	—	1(0/1)	0(0/0)
ゆ	ゆ	0(0/0)	2(1/1)	0(0/0)	2(1/1)
	菰	0(0/0)	1(0/1)	0(0/0)	1(0/1)
よ	よ				
ら	ら	0(0/0)	38(23/15)	0(0/0)	31(19/12)
	屍	—	—	0(0/0)	1(0/1)
り	り	0(0/0)	41(29/12)	0(0/0)	37(28/9)
	聖	0(0/0)	5(5/0)	0(0/0)	4(0/4)
	幸	—	—	0(0/0)	2(0/2)
る	る	0(0/0)	49(35/14)	0(0/0)	30(25/5)
	乳	0(0/0)	1(0/1)	0(0/0)	1(1/0)
	味	—	—	0(0/0)	16(8/8)
	乳	—	—	0(0/0)	2(0/2)
れ	れa	0(0/0)	23(21/2)	0(0/0)	18(18/0)
	れb	0(0/0)	4(3/1)	—	—
	れc	0(0/0)	2(1/1)	0(0/0)	6(4/2)
	色	—	—	0(0/0)	4(3/1)
ろ	ろ	0(0/0)	9(8/1)	0(0/0)	4(4/0)
	路	—	—	0(0/0)	2(1/1)
わ	わ	4(2/2)	4(0/4)	1(1/0)	0(0/0)
	目	1(1/0)	0(0/0)	3(1/2)	3(0/3)
る	る				
る	る				
を	を	4(4/0)	22(18/4)	5(5/0)	20(16/4)
	茂	0(0/0)	5(3/2)	0(0/0)	6(4/2)
ん	ん	0(0/0)	2(0/2)	0(0/0)	1(0/1)

表から、両本には〈か〉〈ま〉〈け〉〈あ〉〈と〉〈a〉を語頭に専用するという有意的な仮名文字遣のあることが知られる。  
○〈か〉について

「か」の中で、両本共に〈あ〉が語頭・語中を問わず用いられるのに対して、〈か〉は大宮本で語頭13例・語中1例、彰考館本で語頭8例、語中1例というように語頭に傾いて使用される。それぞれの語中の例は次の通りである。

(大) たけたかくとをしるきなり (6オ 本文)

(彰) 宿ありかねて音をや啼らむ (歌)

「たけたかく」に〈か〉が配された理由は不明である。「宿ありかねて」の〈か〉は、直前に〈あ〉が用いられているための変字法であろう。彰考館本では〈か〉とともに〈ま〉が例数は少ないながら語頭2例・語中1例というように語頭に傾いて用いられるが、この語中の例も「あすあふせ」(歌)とあってやはり変字法での用字である。

○〈ま〉について

「こ」には、〈こa〉〈こb〉〈ま〉の三字体がある。〈こa〉は現行の仮名字体「こ」とほぼ同じ字形で、〈こb〉はT字に似た字形である。〈こa〉〈ま〉に対して〈こb〉は、〈ろ〉〈とb〉〈そ〉が下接する場合に限って出現する。これを別字体相当として扱うのは、「ころ」「こそ」「こと」という、語と結びつく用字が表語性において有意であると判断したためである。但し、「こと」では「こと(事)」「ことく(如)」「ことなる(異)」の例があり(大・彰とも)同音異義の場合まで区別するのではない。

さて、〈こa〉〈こb〉は語頭・語中の別なく使われているが、〈ま〉はほぼ語頭に偏る。大宮本でこれを語中に用いるのは、「なれまし」の1例である。語中にはあるが、複合語の後項素の頭での使用で、語頭に準じる例として扱える。彰考館本では例外なく語頭に用いている。

○〈とb〉について

同一字母の〈とa〉〈とb〉は次のような字形としての差をもつ。



一致 (休) | (休)

- 大 彰
- ・休かひ | 休かひ
  - ・休くらはな | 休くらはな
  - ・休らてたに | 休らてたに

不一致 (さ) | (休)

- 大 彰
- ・休しのほりて | さしのほりて
  - ・さそはれ | 休そはれ
  - ・さくら | 休くら
  - ・さきぬらし | 休きぬらし
  - ・休ま | さま
  - ・休むし | さむし

(休) | 漢字

- 大 彰
- ・休と | 里

〈休〉が同じ箇所にあるのは約30%程度である。〈志〉はこれよりやや多く45.4%が一致する。ちなみに〈あ〉では全く一致していない。〈さ〉〈休〉は文字として等しい価値(文字観念)を現していることからすると、書写の過程でこの二つの字体の選択は恣意的であってよいはずである。にも拘わらず、それぞれが一定の条件のもとに出現する仮名文字遣が行われていることは、それぞれの書写者のもつ文字への意識が共通していることを示していると思われる。

その一方で、彰考館本になく大宮本にのみみられる仮名文字遣もある。前述の〈り〉を助動詞「けり」に用いるのはその例である。

- ・老木と成にり (3才 歌)
- ・成にり (4ウ 歌)
- ・休はきにり (4ウ 歌)
- ・むかしなりり (5才 歌)
- ・ふりにり (5ウ 歌)
- ・にほひもなれと (6才)

・なふりとて

(7才歌)

「なふれ」「なふり」の他は全て「けり」の例である。但し、「侍<sub>ま</sub>る」(6才)「ふけにける」(5才歌)「ふけ」も「け」の例もあって「けり」で常に「な」を用いているわけではない。

〈な〉以外では、〈せ〉の文字遣が特徴的である。大宮本と彰考館本の〈せ〉の例を全てあげる。

大宮本

(イ) のこ／せて

(2ウ) 行頭

(ロ) 本とせせ

(3ウ)

(ハ) いまの詮／とせせ／

(4ウ) 行末

(ニ) 本とせせ／

(5才) 行末

(ホ) いてたせ／

(5才) 行末

彰考館本

(へ) 老木となせにけき

(歌)

(ト) とをきわたりになせにけり

(歌)

(チ) むかしなせけき

(歌)

(リ) 三輪の杉むらふりにけせ

(歌)

彰考館本はすべて和歌の例。大宮本では5例中4例が行頭・行末に配されている。大宮本の〈せ〉を行頭・行末に置く字体と見ると、(ロ)の「本とせせ」は例外的である。しかし、(ロ)を文の単位で見ると〈せ〉はちょうど文末に位置している。再度引用する。

(ロ) これは貫之やまのかひよりみゆるしら雪と／侍を本とせせ かやうにつねなることのもれ／きたれるを…

行頭・行末の〈せ〉が、ここでは文の切れ目を明示している。句点の機能を含んで記されたものと考えられる。

〈㊦〉の他の例を文の単位で見ると、行末の〈㊦〉もまた全て文末である。

(ハ) あすかゝせのいたつらにのみふりたること／なれとそもほしあへぬ春雨をいまの詮／とせ<sub>㊦</sub> (余白)／

(ニ) 聖廟の御詠を本とせ<sub>㊦</sub> (余白)／

(ホ) 友則かよしのゝさとの詠よりいてた<sub>㊦</sub>／

文末でないのは(イ)のみであることから〈㊦〉を文末の字体とする見方もありうる。しかし、1例ながら行頭で語中の例があることを(ロ) (ハ)と連続的に捉えようとするなら、〈㊦〉は行を単位とする行頭・行末の字体であるとともに文末の字体と見るべきであろう。〈㊦〉には、行頭・行末での用字法と文末の仮名文字遣を併存することになる。文末の仮名文字遣は、行頭・行末という行の切れ目での「綴りの美」としての使用を端緒として、文の切れ目、つまりは有意の用法に展開したものとえよう。

その場合、問題として残るのは「り」の文字観念に属するもう一字体〈へり〉に文末での用例があることであろう。文末の〈へり〉はむしろ〈㊦〉よりも多く検出される。

(行末かつ文末)

①又このみよむましきこと葉ついてにかき／のせ侍<sub>㊦</sub>／ (2ウ)

②南殿の花のさかり右近のつかさ／のたちなるゝおもかけも心にうかへ<sub>㊦</sub> (余白)／建曆のころ後鳥羽院行幸

ありて (余白)／ (3オ)

③きよけにいひ／くたしてたけたかくとをしろきなり／しろきいとのことなるかにほひもなけれ／と… (6オ)

④十一首のせられ侍／うち六首は名所なり八首か本／哥によれ<sub>㊦</sub> (余白)／次にわろしと侍すかたこれにならへ

て… (6ウ)

(行中かつ文末)

⑤昔の席／のちりをはらひてあひかたるゝことあり や／まと哥はいにしへより… (1ウ)

⑥ 建曆のころ後鳥羽院行幸ありて (余白) / (歌の引用) / とも侍りかの代にいてつかへし人の / (3オ)

⑦ :ふるめかしき / さまにて陣につきてことおこなひたる / 躰に哥はよむへきなりめつらしきかどつくりたるは  
しかるへからず (4オ)

⑧ 十一首のせられ侍 / うち六首は名所なり八首か本 / 哥によれり (6オ)

(歌)

⑨ はなは老木となりにけり (3オ)

⑩ とをきわたりに成にけり (4ウ)

⑪ あまつほしあひの栂はきにけり (4ウ)

⑫ ねさめのほとむかしなりけり (5オ)

⑬ みわの杉むらふりにけり (5ウ)

用例数は遙かに(へ)を(上)回っているが、これらは文末を明示する必要度の低いものが大半である。和歌の5例(⑨)は、音数律の支配を受けるためにことさら文末を明示する必要はあるまい。その点、文においては切れ目を記す方がよいのであるが、行中の⑤「あひかたるゝことあり」の場合、次の文との間には余白がある。

⑤  
よひく人のまはるゝあひかたるゝことあり  
あひかたるゝことあり

また行末の②④では、下に余白がまだ十分にあるのに、改行を行っている。

②  
 坊うして南まきなりのいもをのつふ  
 いふらうくくわむいさあむふらうり  
 建唐のふにねるねにほまふらう

余白を設けることや余白・改行によって文末であることが明示されるこれらに、仮名文字遣による文末の示標は過剰であろう。この②④と同様、先の〈ㄏ〉の(ハ)(ニ)は改行によって文末であることが明らかな例でもある。その意味でも(ハ)(ニ)の用字はやはり綴りの美としての用字と言わざるを得ない。それでは、②④に何故〈ㄏ〉が配されなかったかといえば、改行の後に続けて記される文の性格の違いが関係しているのではないかと思われる。②④では歌論本文が続くが、(ハ)(ニ)では和歌の引用が続く。本文が一旦終わり次行からは和歌が記されるときに現れる〈ㄏ〉とは、次行が和歌であることを明示する(なお(ホ)は余白なしの改行の例で、次行に和歌の引用が続く例)。和歌に対する価値観の現れでもあろう。『寂恵法師歌語』では和歌をあげた後にそれに即して論を展開するという記述の仕方をとるため、和歌の引用が新たな論のはじまりを意味しており、段落の末におかれるとも位置づけられる。段落という点では、④は、この本が為家の詠歌と中書王の詠歌という二部の構成になっている、その為家の章の最終部分にあって、より大きな切れ目にあるにも拘らず〈ㄏ〉である。

①③では紙幅の制限が関わりと考えられる。①の「かき／＼のせ侍り」のうち「かき」までは第一丁の最終行にあり、「のせ侍り」はこの丁に収めようとして最終行の横に書き添えている部分である。内容としては、①でちょうど冒頭の序に相当する部分が終わり、この後和歌の引用がはじまる。序の部分を一丁のうちに収め、新しい丁を本論からはじめようとしたための書き添えである。行の左下での書き添えでは、文が終わることが自明であり、〈ㄏ〉を記す必要がなかったものと考えられる。

①



なお、行末での書き添えは①のほか12例ある。大半が右の例と異なって、行末に半角程度のスペースがある場合に起き  
ている。その場合、次のように一語を分断した書き方もある(3例)。



(2ウ)

その一方で、「めつらし／き」(4オ)のように一語を行の内に書き添えようとしたものと(5例)、和歌の例で上の句  
を一行に収めようとしたもの(2例)とがある。行末にスペースがないものでは、助詞「と」の例が2例ある。

こよひのもてあそひとすへし／と／寂恵このことをきくに

(1ウ)

しら雲／と／侍るを

(3ウ)

特に前者は「と」で文が終止し、①と同様の例である。

③は書き添えではないが、行末にあって周囲の行に比べて余白がかなり狭くなっている。①と同様、余白の不足が〈ㄱ〉  
を記せなかった理由であろう。残るは⑥⑦⑧であるが、⑥には別の仮名文字遣によって文の切れ目が明示されていると考  
えられる(後述)。⑦⑧は積極的な理由を見いだせない。

説明しがたいものが2例あるが、〈ㄱ〉に文末明示の機能を認めてよいと思われる。

〈ㄱ〉の仮名文字遣に関連して興味深いのが前述の〈か〉の仮名文字遣である。〈か〉は語頭に用いる傾向にある字体

であるが、〈あ〉に対して文頭に出現する例がある。文頭の「か」は、和歌の例を除くと、次の4例である。

a…とをくもとむるにをよすかの詠をあき／いて侍へし (2ウ)

b 建曆のころ後鳥羽院行幸ありて／(歌の引用)／とも侍りかの代にいてつあへし人の／弘長の此までならへて… (3オ)

c これは貫之やまのあひよりみゆるしら雲と／侍を本とせせあやうにつねなることのもれ／きたれるを… (3ウ)

d (歌の引用)／かのとをきわたりにあらねともと侍を… (4ウ)

文頭に〈あ〉が用いられる例としてcがあるが、これは直前で〈せ〉が文末表示に使われており「か」で文の切れ目を示さなくともよい。これを除けば、文頭の「か」には〈あ〉を排して〈か〉が用いられるといえる。このうち、bは前文が「り」で終わっているのに〈せ〉が使われなかった例(用例⑥)であるが、補うかのように〈か〉が文の切れ目を示していることになる。〈か〉には、文中の単なる語頭の例も本文部分だけで8例あり、語頭と文頭の二つの仮名文字遣が存在しているといつてよい。これは〈せ〉の行頭・行末の文字遣と文末の仮名文字遣が併存していることに対して機能面において類比的である。語頭は多く句頭に位置し、そこでの使用が文頭への使用へと狭く用いられることは自然である。

文頭に〈か〉を記すことは、彰考館本にも一応確認できる。文頭の「か」は大宮本と同じ箇所にある。

a…とをくもとむるに及す／あの詠哥を書出侍へし (2ウ)

b 建曆の此後鳥羽院行幸ありて／(歌の引用)／とも侍りかの御代に出つあへし人の弘長／の此までならへて… (3オ)

c 是は貫之山のあひよりみゆる白雲と侍る／を本とせりかやうにつねなる事のもれ／きたれるを… (3ウ)

d (歌の引用)／かの遠きわたりにあらねともと侍を… (4ウ)

彰考館本ではaに〈あ〉が使用される他は〈か〉である。但し、aに〈あ〉が使われる理由は見いだせず、大宮本ほど文頭に〈か〉を専用しないことのも理由も明らかでない。

これまで位置による有意の仮名文字遣としては、語頭・語中・語末というように語の単位で注意されてきたが、大宮本の〈か〉〈せ〉の仮名文字遣はそのような捉え方に一石を投じるものといえよう。ただ惜しまれるのは、この『寂恵法師歌語』が極めて短い本文であるために用例総数が少なく、ここでの仮名文字遣が一般に対してひとつの可能性を提示することにとどまってしまうことである。この本に見える仮名文字遣がどの程度広がりをもつのか、今後より多くの検証を要する。

注

注1 「順教房寂恵について」『国語と国文学』第35巻第11号 一九五八年十一月

注2 大野晋「仮名遣の起源について」『国語と国文学』第27巻第12号 一九五〇年十二月

注3 拙稿「仮名文字遣序説」『叙説』第26号 一九九八年十二月